

5/20 Wed.

第658回 定期演奏会
サントリーホール 19時開演
SUBSCRIPTION CONCERT No.658 / Suntory Hall 19:00

指揮
Conductor Laureate
ヴィオラ
Viola
コンサートマスター
Guest Concertmaster

ウェーベルン
WEBERN

シン・ドンフン
DONGHOON SHIN

[休憩]
[Intermission]

デュティユー
DUTILLEUX

デュティユー
DUTILLEUX

シルヴァン・カンブルラン (桂冠指揮者) -p.5
SYLVAIN CAMBRELING
アミハイ・グロス -p.6
AMIHAI GROSZ
白井 圭 (ゲスト)
KEI SHIRAI

パッサカリア 作品1 [約15分] -p.8
Passacaglia, op. 1

ヴィオラ協奏曲〈糸の太陽たち〉(日本初演)
[約25分] -p.9
Viola Concerto "Threadsuns" (Japan Premiere)
I. Tempo rubato, sempre cantabile e fluente
II. Feroce

瞬間の神秘 [約16分] -p.10
Mystère de l'instant
I. Appels VI. Choral
II. Échos VII. Rumeurs
III. Prismes VIII. Soliloques
IV. Espaces lointains IX. Métamorphoses (sur le nom SACHER)
V. Litanies X. Embrassement

メタボール [約17分] -p.10
Métaboles
I. Incantatoire
II. Linéaire
III. Obsessionnel
IV. Torpide
V. Flamboyant

5/24 Sun.

第149回 横浜マチネーシリーズ
横浜みなとみらいホール 14時開演
YOKOHAMA MATINÉE SERIES No.149 / Yokohama Minato Mirai Hall 14:00

5/26 Tue.

第692回 名曲シリーズ
サントリーホール 19時開演
POPULAR SERIES No.692 / Suntory Hall 19:00

指揮
Conductor Laureate
ヴァイオリン
Violin
第1コンサートマスター
First Concertmaster

メンデルスゾーン
MENDELSSOHN

コルンゴルト
KORNGOLD

[休憩]
[Intermission]

ドヴォルザーク
DVOŘÁK

シルヴァン・カンブルラン (桂冠指揮者) -p.5
SYLVAIN CAMBRELING
イリア・グリングオルツ -p.6
ILYA GRINGOLTS
林 悠介
YUSUKE HAYASHI

序曲〈フィンガルの洞窟〉 作品26 [約10分] -p.13
"The Hebrides" Overture, op. 26

ヴァイオリン協奏曲 二長調 作品35 [約24分] -p.14
Violin Concerto in D major, op. 35
I. Moderato nobile
II. Romance: Andante
III. Finale: Allegro assai vivace

交響曲 第8番 ト長調 作品88 [約34分] -p.15
Symphony No. 8 in G major, op. 88
I. Allegro con brio
II. Adagio
III. Allegretto grazioso
IV. Allegro ma non troppo

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（公演創造活動））
独立行政法人日本芸術文化振興会
協力：アフラック生命保険株式会社

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（公演創造活動））
独立行政法人日本芸術文化振興会
協力：横浜みなとみらいホール(24日)
※5/26公演では日本テレビの収録が行われず。

5/30 Sat.

第287回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SATURDAY MATINÉE SERIES No.287 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

5/31 Sun.

第287回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SUNDAY MATINÉE SERIES No.287 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

指揮
Conductor Laureate

ピアノ
Piano

第1コンサートマスター
First Concertmaster

ベルリオーズ
BERLIOZ

サン=サーンス
SAINT-SAËNS

[休憩]
[Intermission]

チャイコフスキー
TCHAIKOVSKY

シルヴァン・カンブルラン (桂冠指揮者) -p.5
SYLVAIN CAMBRELING

シモン・ネーリング -p.7
SZYMON NEHRING

林 悠介
YUSUKE HAYASHI

序曲〈ローマの謝肉祭〉 作品9 [約8分] -p.16
Le carnaval romain, op. 9

ピアノ協奏曲 第2番 ト短調 作品22 [約24分] -p.17
Piano Concerto No. 2 in G minor, op. 22

I. Andante sostenuto
II. Allegro scherzando
III. Presto

交響曲 第6番 口短調 作品74 〈悲愴〉 [約46分] -p.18
Symphony No. 6 in B minor, op. 74 "Pathétique"

I. Adagio – Allegro non troppo
II. Allegro con grazia
III. Allegro molto vivace
IV. Finale: Adagio lamentoso

指揮

シルヴァン・カンブルラン
(桂冠指揮者)

SYLVAIN CAMBRELING,
Conductor Laureate

千変万化!
“色彩の魔術師”が贈る
多彩なプログラム



©読響

桂冠指揮者カンブルランがフランス作品やドヴォルザーク第8番、チャイコフスキー〈悲愴〉など3プログラム・5公演を指揮し、バラエティーに富んだ曲目を披露。カラフルな音色で魅力的な世界へ誘う。

1948年、フランス・アミアン生まれ。2010年から9年間、読響常任指揮者を務め、17年11月にはカンブルラン指揮のメシアン〈アッシジの聖フランチェスコ〉がサントリー音楽賞を受賞。19年4月、桂冠指揮者に就任。22年12月には、^{いちやなぎとし}一柳慧の新作ヴァレーズ〈アルカナ〉などを指揮し、読響の文化庁芸術祭大賞受賞に貢献した。

バーデン・バーデン&フライブルクSWR響の首席指揮者、ベルギー王立モネ歌劇場、フランクフルト歌劇場、シュトゥットガルト歌劇場の音楽総監督などを歴任。クラシック音楽界の既存の概念にとらわれず、常に柔軟かつ斬新な発想で数多くのプロジェクトを成功へと導いた。現在はハンブルク響の首席指揮者、クラングフォルム・ウィーンの名誉首席客演指揮者、ドイツ・マインツのヨハネス・ゲーテンベルク大学指揮科の名誉教授を務めている。これまでにウィーン・フィル、ベルリン・フィル、パリ管、ロサンゼルス・フィル、サンフランシスコ響、モントリオール響、ベルリン・ドイツ響、ミュンヘン・フィル、フィルハーモニア管など一流楽団に客演。オペラではパリ・オペラ座、ザルツブルク音楽祭などに出演した。録音も数多く、SWR響との《メシアン／管弦楽作品全集》は、一人の指揮者と同一の楽団による世界初の全集として、欧州の主要な音楽賞を総なめにした。読響と共演したメシアン〈アッシジの聖フランチェスコ〉、マーラーの交響曲第9番のCDも好評を博している。

5/20
定期

5/24
横浜マチネー

5/26
名曲

5/30
土曜マチネー

5/31
日曜マチネー

Maestro

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
共催：東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（公演創造活動））
文化庁 独立行政法人日本芸術文化振興会

5/20
定期

Artist



©Marco Borggreve

ヴィオラ

アミハイ・グロス

AMIHAI GROSZ, Viola

ベルリン・フィルの第1ソロ・ヴィオラ奏者を務める俊英。11歳の時にヴァイオリンからヴィオラに転向し、若くして数々の賞を受賞。エルサレム音楽センターのヤング・ミュージシャンズ・グループにも選出される。ソロ、室内楽、オーケストラと幅広く活躍しており、ソリストとしてチューリヒ室内管、ワルシャワ国立フィルなどに出演するほか、バレンボイム、ヤンセン、ラクリン、ソヒエフ、ゲリಂಗスらをはじめとした一流アーティストと共演。コンサートホール、ウィグモア・ホールなどの著名コンサートホールで演奏している。ヴェルビエ音楽祭、BBCプロムスなど世界各地の音楽祭にも出演している。使用楽器は、個人コレクションより終身貸与された1570年製ガスパーロ・ダ・サロのヴィオラ。読響初登場。



ピアノ

シモン・ネーリング

SZYMON NEHRING, Piano

ポーランドで最も才能のあるとされる期待のピアニストのひとり。2017年にルービンシュタイン国際ピアノコンクールで優勝。15年にクリスチャン・ツイメルマン奨学金を受ける。同年のショパン国際コンクールではファイナリストとなり、聴衆賞などを受賞。これまでにワルシャワ・フィル、イスラエル響、バンベルク響などと共演して好評を博す。19年にはオルフェウム財団に招待され、チューリヒ・トーンハレ管と共演。25年1月にはカンブルラン指揮ハンブルク響と共演して絶賛された。16年には自身のデビューCDがポーランド・フォノグラフィック・アカデミーにおいてフレデリック賞を受賞した。22年、23年、そして今年1月にもリサイタルで来日を果たし、大きな話題を呼んだ。読響初登場。

5/30
土曜マチネー5/31
日曜マチネー

Artist

5/24
横浜マチネー5/26
名曲

Artist

多彩なレパートリーで高い評価を得ている世界的名手。サンクトペテルブルク音楽院で研鑽を積み、1998年にパガニーニ国際ヴァイオリン・コンクールで史上最年少優勝を果たした。これまでにバイエルン放送響、ウィーン響、バーミンガム市響、イスラエル・フィル、ロサンゼルス・フィルなどと共演。またオーケストラとのレパートリーのほか、古楽や現代曲など演奏機会の少ない作品にも取り組む。室内楽ではグリーンゴルト弦楽四重奏団の第1ヴァイオリンを務め、アルトシュテット、ヴィトマンらと共演している。CD録音も数多く、スロボデニューク指揮ガリシア響とのストラヴィンスキー・ヴァイオリン作品全集はディアパゾン・ドールを受賞した。使用楽器は1718年製ストラディヴァリウス「ex-Prové」。読響初登場。



©Kaupo Kikkas

ヴァイオリン

イリア・グリーンゴルト

ILYA GRINGOLTS, Violin

ウェーベルン パッサカリア 作品1

アントン・ウェーベルン(1883~1945)は、師であるアルノルト・シェーンベルク、同門のアルバン・ベルクとともに新ウィーン楽派の一翼を担う作曲家である。後期ロマン派の作風から出発し(ワーグナーの楽劇に心酔し、ウィーン大学在学中にバイロイト^{もう}詣でを果たした)、1904年から4年間、シェーンベルクに師事した。極小形式(ミニアチュール)の無調へと進み、その弱音と音色の微細なニュアンスの音楽から「ピアノニッシモ・エスプレッシーヴォの作曲家」と呼ばれた。さらに1924年からは12音技法による作品を手がけ、同時代のみならず第二次世界大戦後の前衛作曲家たちにも多大な影響を与えた。

〈パッサカリア〉は、シェーンベルクの指導のもとで書き上げた最後の作品である。パッサカリアとは、バロック時代の変奏曲形式のひとつで、反復される低音主題の上に対位的な声部が構成される。ここでは本来の3拍子ではなく4分の2拍子とし、厳格な伝統とブラームスなどからの流れを受け継ぎ、ロマンティックな抒情を漂わせつつ対位法への指向を強めた。簡潔な主題は豊かな音響世界を切り開き、すべての音が雄弁で密度の濃い音楽が展開される。

全体は、主題と23の変奏とコーダから成る。8音で構成される主題は、まず弦楽器のピッツィカートによって*ppp*で示される。第1変奏は、主題を上声に置いて和声付けされ、6番目の和音がトリスタン和音となるのは興味深い。最強音に達する第8変奏を経て、第11変奏までが第1部。第12変奏から第15変奏までの間奏風の第2部は、ゆるやかで抒情的。再び弱音となる第16変奏から第23変奏までの第3部は、これまでの旋律が自由なリズムのもとで展開される。長いコーダは、大きな高まりを見せたあと、静寂へと導かれる。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1908年／初演：1908年11月8日、ウィーン／演奏時間：約15分
楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(大太鼓、小太鼓、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、グロックンシュピール、シロフォン、ヴィブラフォン、鐘、ゴング、銅鑼、クロテイル)、ハープ、ピアノ、チェレスタ、弦五部

シン・ドンファン ヴィオラ協奏曲〈糸の太陽たち〉(日本初演)

「ウンスク・チンの再来」と期待を集めるシン・ドンファン(1983~)は、韓国・ソウル生まれ。ソウル大学でスビ・カン、ウンスク・チンに作曲を学び、2014年にロンドンに移ってからは、ギルドホール音楽院でジュリアン・アンダーソン、キングス・カレッジでジョージ・ベンジャミンに師事した。2016年に英国王立フィルハーモニック協会作曲賞、19年に英国批評家協会若手音楽賞、22年にはクラウディオ・アバド作曲賞を受賞。この受賞をきっかけに、昨年は、本作がベルリンで、チョ・ソジンのために書いたピアノ協奏曲がロンドンで初演、2026年もロサンゼルス・フィルのための新作の発表が予定されるなど、飛躍的な活躍をみせている。

ヴィオラ協奏曲〈糸の太陽たち〉は、ベルリン・フィル、京畿フィル、ミネソタ管、ウィーン・トーンキュンストラ管の共同委嘱で2024年に作曲された。同年に80歳で逝去したハンガリーの作曲家ペーテル・エトヴェシュを追悼するとともに、作品は初演者のベルリン・フィル首席ヴィオラ奏者アミハイ・グロスに献呈された。

小説家志望だったシン・ドンファンは、創作の着想を文学から得ることが少なくない。タイトルの「糸の太陽たち」も、孤高の詩人パウル・ツェラン(1920~70)の同名の、比喩的で謎めいた短詩(1968年刊)による。楽曲は切れ目なく演奏される2楽章構成で、作曲者によれば、**第1楽章**はソナタ形式の提示部、**第2楽章**は展開部と再現部とする。変二長調とイ長調の主和音が意識されるが、自由に大胆に、超絶技巧の独奏ヴィオラとともに音楽の様々な境界を横断し、突き進む。まずは、独奏ヴィオラのカデンツァに続き、オーケストラとの対話が始まり、変二長調の第1主題と、3拍子の第2主題が示される。ベルクのヴァイオリン協奏曲の影響が色濃く、第2楽章では二つの主題が展開される。再現部では第1主題がイ長調で現れ、情熱的なクライマックスを経て、最後は美しく静かに結ばれる。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：2024年／初演：2025年1月9日、ベルリン／演奏時間：約25分
楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2(エスクラリネット持替)、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(大太鼓、小太鼓、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、グロックンシュピール、シロフォン、ヴィブラフォン、鐘、ゴング、銅鑼、クロテイル)、ハープ、ピアノ、チェレスタ、弦五部、独奏ヴィオラ

デュティユー 瞬間の神秘、メタボール

20世紀後半のフランスの作曲家アンリ・デュティユー（1916～2013）は、パリ音楽院で学び、1938年に「ローマ賞」を受賞。大戦後は、フランス国営放送局の音楽制作部門に務めた。同時代の様々な音楽に触れ、交響曲第1番（1950）で国際的な評価を受け、1961年にパリ音楽院作曲科教授に就任、エコール・ノルマルでも教鞭を執った。その音楽は保守でも前衛でもなく、洗練された明晰さと自由な無調、さらに12音技法への接近もみせる。〈瞬間の神秘〉では多彩で豊かな音色、〈メタボール〉では現代のオーケストラの機能を存分に発揮させた迫力の音響と作曲家独自の繊細なテクスチャが注目される。

〈瞬間の神秘〉は、スイスの指揮者・作曲家のパウル・ザッハーの委嘱で、24の弦楽器、ハンガリーの民俗楽器ツィンパロンと打楽器のために1989年に作曲された。全体は、デュティユーが、瞬間の「スナップショット」として連続して演奏される10曲の小品から成る。ツィンパロンのエスニックな響きと弦楽器の緻密なアンサンブルが独特の対比をみせる。

第1曲「呼びかけ」 弦楽器の各パートは細分化され、高音域から下行するなかで掛け合い、次第に緊張を高めていく。**第2曲「エコー」** 綿密な模倣進行。響きの密度が変化を続け、ツィンパロンとティンパニで断ち切られる。**第3曲「プリズム」** 全音階的な和声とポリリズムのピッツィカート音型が対比させられ、ファ#に達する。**第4曲「遠い空間」** 高音と低音でモチーフが反復され、オクターヴによる反行カノンとなる。**第5曲「リタニ（連禱）」** 弦楽器のユニゾンによる聖歌風の旋律の間をツィンパロンが駆け抜け、それを弦楽器が模倣する。**第6曲「コラルール」** 低弦主体で静かに進行する。**第7曲「ざわめき」** 第1曲と同様に弦楽器は細分化され、持続的なグリッサンドで推移し、強度を増していく。**第8曲「独白」** トリルの持続音に支えられた、弦楽器ソロのカデンツァ。**第9曲「変容（ザッハーの名による）」** 6音音型（ミ♭、ラ、ド、シ、ミ、レ）に基づく対位法的変奏。レガートとピッツィカートの音色の対比が特徴的で、12音の和音に発展してから収束する。**第10曲「激化」** ざわめくスピッカートの音型が上昇し、全合奏によるクライマックスへと向かう。

〈メタボール〉は、アメリカのクリーヴランド管弦楽団の創設40周年（1948年）をきっかけに、同楽団の音楽監督で指揮者のジョージ・セルの委嘱によって作曲された。デュティユーは、作曲の前にセル指揮の同楽団の演奏を聴き、その演奏能力の高さに刺激を受け、1964年に完成した。メタボールとは、修辞学の用語で、ものごとの様相や性質が連続的に変化していく様子を表す。音楽における変奏や変容にこだわり続けたデュティユーが、小さな変化の連続によって形を変えていくこの曲に相応しいと考え、タイトルに選んだ。

全体は、5つの曲から構成され、連続して演奏される。冒頭で示された主題が変容して新たな素材を作り出し、それが次の主題の一部になるといったように各曲は有機的に連関している。また、曲ごとに異なる楽器群が活躍することも特徴で（第1曲木管楽器、第2曲弦楽器、第3曲管楽器全般、第4曲打楽器、第5曲全楽器）、それにより、音色の変化や多彩な響きが生み出される。

第1曲「呪術的に」（ラルガメンテ）木管楽器によるミ-シ♭の音型がゆるやかに反復され、それが楽曲全体に広がる。**第2曲「線的に」**（レント・モテラート）弦楽器のみの編成。低音で静かにうごめき、やがて繊細な響きのなかで抒情的な旋律が浮かび上がる。**第3曲「憑りつかれたような」**（スケルツァンド）コントラバス独奏が示す12音音列による主題が、各楽器に響き渡る。金管楽器が活躍し、打楽器、チェレスタの音色が加わる。**第4曲「麻痺したような」**（アンダンティーノ）打楽器が弱音で刻むリズムにハーブが絡む。クラリネットのうねるような音型が繰り返され、管弦楽が静かに響く和音を添える。**第5曲「炎のような」**（プレスト）弱音から始まり、次第に熱を帯びてくる。これまでの楽想が回帰され、終盤で第1曲の主題が戻り、迫力の終結となる。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

【瞬間の神秘】作曲：1989年／初演：1989年10月22日、チューリヒ／演奏時間：約16分
楽器編成／ティンパニ、打楽器（サスペンデッド・シンバル、チャイナゴング、銅鑼）、ツィンパロン、弦五部
【メタボール】作曲：1959～64年／初演：1965年1月14日、クリーヴランド／演奏時間：約17分
楽器編成／フルート4（ピッコロ持替）、オーボエ3、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、エスクラリネット、バスクラリネット、ファゴット3、コントラファゴット、ホルン4、トランペット4、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、小太鼓、トムトム、シンバル、サスペンデッド・シンバル、チャイニーズ・シンバル、トライアングル、グロッケンシュピール、シロフォン、カウベル、木魚、銅鑼）、ハーブ、チェレスタ、弦五部

メンデルスゾーン

序曲〈フィンガルの洞窟〉 作品26

火山から流れ出た溶岩がゆっくりと冷えて固まると、柱状節理と呼ばれる規則正しい六角形の柱状の構造を作り出す。日本では兵庫県の玄武洞がよく知られる。スコットランドのヘブリディーズ諸島にあるスタファ島では、この整然とした柱状節理に波がくりかえし打ち付け、浸食が進んだことで、美しい列柱が並ぶ神秘的な海蝕洞ができあがった。これが「フィンガルの洞窟」だ。フィンガルとはケルトの伝承に登場する知恵と力を兼ね備えた英雄の名である。

自然界の物理現象によって生まれた奇観に、19世紀ヨーロッパの知識人たちは人知を超えた崇高さ、神秘とロマンを読みとった。「フィンガルの洞窟」を一目見ようと、詩人のワーズワース、ジョン・キーツ、画家のターナー、小説家のジュール・ヴェルヌら多くの芸術家や文学者がこの地を訪れた。作曲家フェリックス・メンデルスゾーン（1809～47）もそのひとり。1829年夏、メンデルスゾーンはロンドンを訪れた後、スコットランド地方まで足を伸ばした。幾何学的な柱の造形と洞窟内に深く豊かに反響する波の音は、作曲家の想像力を大いに刺激したに違いない。メンデルスゾーンは姉ファニーに宛てて「ヘブリディーズ諸島でどんなに感銘を受けたかをお伝えするために、頭に浮かんだ楽想を送りましょう」と記して、曲の冒頭の短いスケッチを送っている。

楽曲の完成までには時間がかかった。ようやく翌30年末に初稿が書き上げられるが、メンデルスゾーンは満足できず、大幅な改訂を経て1832年にロンドンで作曲者自身の指揮により初演され、その後も手直しが加えられた。

曲は波打つような寂しげな主題で始まり、海と島々が織りなす雄大な光景を生き生きと描き出す。静かな波の揺らぎから荒々しい高揚へと至る音楽の推移が、海の表情の刻々たる変化を鮮やかに浮かび上がらせる。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

5/24

横浜マチネー

5/26

名曲

Program Notes

コルンゴルト

ヴァイオリン協奏曲 二長調 作品35

音楽史には数々の神童たちが登場するが、「モーツァルトの再来」と称えられたオーストリアのエーリヒ・ヴォルフガング・コルンゴルト(1897~1957)もそのひとり。早くも9歳で作曲したカンタータを聴いて、マーラーは「天才だ!」と驚嘆した。コルンゴルトは10代からウィーンで名声を築いていた。

ところがナチスの台頭を恐れて、ユダヤ系のコルンゴルトは1934年にアメリカへ逃れ、ハリウッドで映画音楽の作曲家に転身する。そして、アカデミー音楽賞を獲得するなど、この分野に大きな足跡を残した。戦後、コルンゴルトは芸術音楽の世界に帰ってくる。コルンゴルトにヴァイオリン協奏曲の作曲を頼んだのは友人でもあった名ヴァイオリニスト、ブロニスラフ・フーベルマン。しかし晩年のフーベルマンの不調もあり、47年の初演はヤッシャ・ハイフェッツが担った。初演は大成功を収めたが、映画音楽が素材に用いられていることから、ある批評家は曲を「ハリウッド協奏曲」と揶揄した。映画音楽を一段下に見たような発言だが、現代の感覚からすると、映画音楽風であることはむしろ肯定的にも感じられるのがおもしろいところである。

第1楽章 モデラート・ノビレ 冒頭の甘美な主題は映画「沙漠の朝」(1937)の音楽が転用されている。中盤では映画「革命児ファレス」(1939)の音楽にもとづくのびやかでメランコリックな主題が独奏ヴァイオリンで奏でられる。

第2楽章 ロマンس、アンダンテ ゆったりとした陶酔的な主題による緩徐楽章。映画「風雲児アドヴァース」(1936)の音楽が使われている。

第3楽章 アレグロ・アッサイ・ヴィヴァーチェ 独奏ヴァイオリンの華麗な技巧で彩られたフィナーレ。映画「放浪の王子」(1937)の音楽を素材に用いて、ユーモアをにじませつつエネルギッシュな楽想を展開する。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1945年／初演：1947年2月15日、セントルイス／演奏時間：約24分
楽器編成／フルート2(ピッコロ持替)、オーボエ2(イングリッシュ・ホルン持替)、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2(コントラファゴット持替)、ホルン4、トランペット2、トロンボーン、ティンパニ、打楽器(大太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、グロッケンシュピール、シロフォン、ヴィブラフォン、鐘、銅鑼)、ハープ、チェレスタ、弦五部、独奏ヴァイオリン

ドヴォルザーク

交響曲 第8番 ト長調 作品88

「あいつがゴミ箱に捨てたスケッチだけでも一曲書けそうだ」とは、アントニン・ドヴォルザーク(1841~1904)の卓越したメロディーメーカーぶりを称えたブラームスの言葉。ブラームスはいち早くドヴォルザークの才能を認め、ベルリンの出版業者ジムロックに対して彼を推薦した。おかげでドヴォルザークは〈スラヴ舞曲集〉で大きな成功を収め、名声をヨーロッパに広めることになる。以来、ジムロックはドヴォルザークと協力関係を続け、作品の出版に尽力した。

ところが、次第に両者の関係に溝が生まれてしまう。売れ行きのよい小品や歌曲を求めるジムロックと、交響曲のような大作に創作のエネルギーを注ぎ込みたいドヴォルザーク。交響曲第7番は〈スラヴ舞曲集〉の続編を書くことを条件にかるうじて出版できたが、いよいよ交響曲第8番で両者の思惑は平行線をたどる。「大規模な作品は売れない」と不十分な報酬しか提示できなかったジムロックに対して、すでに作曲家として自信を深めていたドヴォルザークはついに首を縦に振らなかった。売れ筋商品を求める出版社と芸術的な高みを目指す創作者という両者の立場の違いは、現代の事情となら変わるものではない。結局、交響曲第8番はイギリスのノヴェロ社から出版されることとなった。かつてこの曲が「イギリス」の愛称で呼ばれていたのは、このような出版事情を反映している。

第1楽章 アレグロ・コン・ブリオ 哀愁を帯びたチェロの主題で開始される。フルートが楽しげな主題を奏で、熱気に満ちた緩徐楽想が展開される。

第2楽章 アダージョ 柔和でひなびた楽章。木管楽器の小鳥がさえずる。

第3楽章 アレグレット・グラツィオーソ メランコリックなワルツ。

第4楽章 アレグロ・マ・ノン・トロポ 楽天的なファンファーレで開始され、主題と変奏が続く。次々と表情を変えながら、力強いクライマックスを築く。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1889年／初演：1890年2月2日、プラハ／演奏時間：約34分
楽器編成／フルート2(ピッコロ持替)、オーボエ2(イングリッシュ・ホルン持替)、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、弦五部

5/24

横浜マチネー

5/26

名曲

Program Notes

5/30

土曜マチネー

5/31

日曜マチネー

Program Notes

ベルリオーズ

序曲〈ローマの謝肉祭〉 作品9

〈幻想交響曲〉をはじめとして革新的な交響楽作品を世に送り出してきた、19世紀のロマン派を代表するフランスの作曲家エクトル・ベルリオーズ（1803～69）。ときに彼の作品は、その革新ぶりゆえに世間に認められないこともあった。そのひとつが、オペラ〈ベンヴェヌート・チェッリーニ〉（1838年初演）である。音楽面でのリズムの複雑さに加え、グランド・オペラの慣習からすると型破りなストーリーをもつこの作品はパリの聴衆に受け入れられず、わずか3回の上演で打ち切りとなった。しかし、自作の素材に自信のあったベルリオーズは、オペラから二つの主題群を取り出し、1844年に独立した演奏会用作品に仕立て直した。それこそが、本日演奏される序曲〈ローマの謝肉祭〉である。初演は同年2月3日、パリのエルツ・ホールで作曲者自身の指揮で行われ、聴衆の要求によりその場でアンコール演奏されるほどの大成功を収めた。ちなみに曲名は、原作のオペラでローマを舞台に描かれる、仮面をつけた群衆や大道芸人が歌い踊る賑やかな謝肉祭の場面から取られたもの。本曲の急速な主部はこの謝肉祭の場面で群衆が歌い踊る音楽に基づいている。

本作は、大まかに言うならば、短い急速な序奏、ゆったりした部分、そして急速な部分からなる3部構成。序奏（アレグロ・アッサイ・コン・フォーコ）では、全管弦楽が激しい主部の断片を打ち出した後、一転してイングリッシュ・ホルンで、八長調の叙情的な主題が奏でられる（アンダンテ・ソステヌート）。旋律はヴィオラに引き継がれ、様々な楽器によって組み合わせられながら進行する。次第に打楽器が加わり音楽は高揚し、急速で華やかなアレグロへと移る。シンバルやタンブリンに彩られた祭りの賑々しい高揚感が見事に描かれている。音楽は叙情的な中間部を経て熱狂的な終結部へとなだれ込んで終結する。

〈山本明尚 音楽学〉

作曲：1843～44年／初演：1844年2月3日、パリ／演奏時間：約8分
 楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、コルネット2、トロンボーン3、ティンパニ、打楽器（トライアングル、シンバル、タンブリン）、弦五部

サン＝サーンス

ピアノ協奏曲 第2番 短調 作品22

華麗な名人芸を披露するソリストと^{けんらん}絢爛壮麗なオーケストラとが競演する、独特な魅力を放つジャンル、それが協奏曲だ。モーツァルトやベートーヴェンの時代から今日まで高い人気を誇っている花形ジャンルであり、多くの名作がピアノの名手でもあった作曲家によって生み出されてきた。これには、交響曲と組み合わせる自身のピアノの腕を世にアピールするための戦略としての側面もあった。彼らの演奏は残念ながら今日までは残らないが、作品に刻まれた難易度と華麗さは、作曲者自身がいかにか卓越したピアニストであったかを雄弁に物語っている。

カミーユ・サン＝サーンス（1835～1921）もまたその一人である。神童の呼び声高く10歳で演奏会デビューを果たし、パリ音楽院で学んだのち、教会オルガニストとして活動しながらキャリアを積み、国際的な成功を収めた。ピアノ協奏曲第2番は1868年、ロシアの大ピアニスト、アントン・ルビンシテインのパリ滞在をきっかけに、わずか17日間で書き上げられた。初演はサン＝サーンス自身のピアノとルビンシテインの指揮で行われたが、練習不足で本人も演奏に不満だったという。とはいえ、ピアノの華麗な書法と繊細な管弦楽の掛け合いが魅力的な本曲は、彼の代表作として今日も演奏され続けている。

緩－急－急という3楽章からなっている。第1楽章（アンダンテ・ソステヌート）はバッハのオルガン幻想曲を思わせる即興的なピアノ独奏で幕を開け、管弦楽の登場後に憂いを帯びた主題が提示される。第2楽章（アレグロ・スケルツァンド）は一転して軽快洒脱なスケルツォ。小気味よいリズムミク的な和音のパッセージが主題となっている。イタリアの急速な舞曲タランテラに基づく第3楽章（プレスト）は、ピアノとオーケストラによる怒涛の音の奔流が聴く者を圧倒する迫力に満ちており、その勢いそのまま全曲を閉じる。

〈山本明尚 音楽学〉

作曲：1868年／初演：1868年5月13日、パリ／演奏時間：約24分
 楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、打楽器（シンバル）、弦五部、独奏ピアノ

5/30

土曜マチネー

5/31

日曜マチネー

Program Notes

5/30

土曜マチネー

5/31

日曜マチネー

Program Notes

チャイコフスキー

交響曲 第6番 口短調 作品74 〈悲愴〉

ロシアを代表する世界的作曲家ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー（1840～93）。ロシアで最初の本格的な音楽学校、ペテルブルク音楽院の第一期生にして、モスクワ音楽院の設立時の教授。可憐なサロン風の小品から大規模で深遠な内容を持つ交響曲、さらには数時間にもおよぶオペラやバレエまで、ジャンルをまたいで数々の名曲を書き続けたその仕事は驚異的と言って過言ではないだろう。そんな彼の生涯のまさしく終わりに書かれた「白鳥の歌」が、交響曲第6番だ。自作への厳しい批判精神で知られたチャイコフスキーですら、じっくりと書き上げた本作を「私の最良の、もっとも誠実な作品だ。他のどの作品よりも愛している」と讀^たえた。1893年10月28日の初演時、当時は型破りな構成から当惑をもって受け入れられた。しかし、11月6日にチャイコフスキーがコレラにより急死すると、多くの人が作曲者自身のレクイエムとして本作を受け入れるようになった。

交響曲は4楽章からなる。**第1楽章**（アダージョ～アレグロ・ノン・トロppo）はファゴットの低音による暗鬱な序奏で始まり、弦楽器によって提示されるリズムックでエネルギーギッシュな第1主題、叙情的でドラマチックな第2主題が対比される。二つの主題が様々に変奏される展開部では爆発的な頂点を築き上げ、ロシア正教会の聖歌が引用される。**第2楽章**（アレグロ・コン・グラツィア）は不思議なワルツ風の楽章。通常ワルツは3拍子だが、5拍子で書かれており、独特のリズムがもたらす揺らぎが美しさを生み出している。**第3楽章**（アレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ）は行進曲的な激しい楽章。静かな導入部から次第に堂々たる付点リズムの動きが支配的となり、圧倒的なクライマックスを築き上げて終わる。**第4楽章**（アダージョ・ラメントーソ）は、交響曲としては異例の静寂に満ちたフィナーレ。ベートーヴェン以来の華々しく晴れやかな終楽章を置くという伝統を覆し、口短調の和音が静寂のうちに作品を閉じる。

〈山本明尚 音楽学〉

作曲：1893年／初演：1893年10月28日（西暦）、サンクトペテルブルク／演奏時間：約46分
 楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、銅鑼）、弦五部